

(二) 平林たい子

〈文学少女平林たい子君の持論〉

昭和二年頃、『若草』誌上で、たい子君が試みた「女流文士観」が、端なく小論争をひき起こし、堀江かどえ、生田花世の諸氏が、何か少し酬いたりしたことがある。然し、その酬い方が、淑女的であつたためか、それとも少々まづかつたからか、その後いくほどもなく、勝ちほこつたような態度で、寸分ちがわぬ矢張り「女流文士観」を、文学少女のたい子君、再びたしか読売かで発表した。その時には誰も何とも言わなかつたので昭和三年かには『女人芸術』？で同じようなことを書き、座談会でも言った。四年の秋頃には『東京朝日』に、よく記憶しないが、「近頃の女流文士観」といつたような、これも少しも違

わぬ意見の文をのせた。何もほかに、意見というようなものを、一つも（敢えていえば）持ち合わせていない彼女の、たつた一つの、取つて置きの持論。フタを開けて見れば、かわいそうなほどの代物なのだが、仕方がない。

二

さてそれはこうである。「現代の我国女流文士を特徴づける所の一つの特徴は」とたい子君は言うのだ。「ごく少数の人を除いたあとは、何のことはない、雑文家ばかりだ。作家とか、評論家とかいう、分業的な名前をつけるには、あまりに非専門的である」かくて彼女は、それに対する彼女自身の批評として、作家は作家、評論家は評論家としての、堂々たる専門的の立場を貫びたい。つまり、厳肅な分業意識に貫かれてありたいと言ふのだ。

三

文学少女たい子君の、かわいそうなこの愚かな持論をぶつ壊すのは、一秒間で足りる。例えば、こう反問するのだ。たい子君よ、果してその現象が、君のいうように「女流文士のみ」を特徴づける所の「一つの特徴」であるかね。

このたつた一つの反問で、彼女の「女流文士観」は、全然ゼロになる。なぜなら彼女の

女流文士観は「現代の我国女流文士を特徴づける所の一つの特徴は」という点に、出発しているのだから。ところが彼女のいうその特徴なるものは、女流のみのものではなく、大いに男流のものでもあるのだからね。

四

なくなつた内田魯庵が、かつてたい子君と少しも違わぬことをいつたことがある。けれどそれは「我國の現代文士（主として男流文士）の特徴は」ということを前提として、評論家とか、作家とかいう名前をつけるには、何れもが、余りに非専門的で、つまり雑文家なのだ、という意見であつたのだ。

そう言えば、かつての評論家には内田魯庵があり、幸田露伴等々があるが、それに対して、今は大宅壮一であり、平林初之輔であるのなど、なるほど全く、専門から非専門へを、物語っている。つまり、昔のそれは本格（？）的存在なんだが、今の諸君は通俗的存在である。

作家でもそうだ。尾崎紅葉、夏目漱石（これ等の人々は厳めしき専門的部門をもち、従つて門下生をもつのだ）に対し、今の林房雄君、小堀甚二君はどうなんだ。

五

さて、ところで、右のような現象を、内田魯庵的の立場から批評すると、それは「軽蔑すべき現象」である。だが、真に目ざめた者、新時代に生きる者の立場から批評すれば、それらの現象は、「当然」の、また、それと共に「未来」を予想せしめる、新しい萌芽をすらもつものとして、観察されるのだ。

ところで、たい子君だが、彼女は魯庵的、保守的の立場から、批評している。否、「批評」とまで、それは言われるほどのものではないが、ともあれ、持論として、あちこち持ち回っているところを見れば、魯庵的、保守的、反動的の根拠と、たい子君のそれとが、よくよく、何処かで一致している点があるだろうことは、肯つかれるのだ。

では何処で？ それは後にいうが、誤謬の第一は、彼女たい子君が、マルクス陣営にまぎれ込んだことにある。マルクス陣営は、隠れた半面において、反動そのもので、いわば既成政治家が、無産者をごまかさんがために、表面形を変えているといったような、従つて内面は矛盾だらけの、反動主義、保守主義なのだから、たい子君のような幼稚な文学少女の口を通じて、時々本音を吹いてしまうというような結果になる。

六

文学における（ひいては何れの層でもだが）専門的、分業的形態および意識の崩壊的現象

(むつかしい書き方だが、読者よ、がまんして下さい)に對しては、二つの見方を以てしなければならぬ。

一つは経済的に、他は政治的あるいは社会的に。さて、資本主義経済に立脚する現代にあつて、文芸家が「雑文」を稼ぐべく余儀なくされたことは、例えば菊池寛、久米正雄等の時代からの、真文芸と通俗文芸の使い分けあたりから始まり、従来の小説、詩、評論、その他隨筆等における専門的の城塞は、経済的原因によつて、次第に崩壊し、今や小説家であると共に詩人でもあり、あるいは隨筆家でもあり、評論家でもあるというようになってきた。たい子君はこの現象を「女流文士を特徴づける現象だ」と見るが、それは余りに近視眼的の見方というものだ。請う見よ。男流雜文家の何ぞ多士濟々たるやをだ。

だが翻つて思うに、小説とか、詩とか、評論とか、感想等の、文芸上の分業は、文芸の本質から、もしくはその進化過程において考える時、必ずしも確乎不動の分業ではない。歴史を遡つて見れば、かつてそれらは、一個の文学者による諸産物であつたこともある。だから、今後とても、一個の人が、小説も書き、詩も書き、評論も書くというような、総合的能力を持つようになるかも知れない。否、現在のいわゆる雜文家的の現象が、既にその芽生えを意味するものではないか。

七

分業形態の崩壊から綜合形態の抬頭へ、このことはあらゆる事物の上に認められる必然の進化過程である。だのにマルクス主義者は、分業というものを、神様のように、ありがたく拝んでいる。さてこそ、たい子君、現代文士の反分業的傾向を、反マルクス主義的だと考えたわけだな。

もつとも、それは確かに、反マルクス主義的ではある。それは分業の宿命的崩壊を物語るものであり、アナキズムが目ざす事物の綜合化への推移を裏書きするものだからだ。

経済的原因が、文学の分業的、専門的の形態および意識を崩壊せしめつつあるように、政治的社会的の原因は、文学の綜合的形態を抬頭せしめる。

例えば、一時代の政治的社会的革命期にあつては、文学および文学者は、必然に非専門的、一般的であることを例とする。フランス革命の前後にあつて、かのルソーは詩人であり、小説家であり、評論家であり、思想家であつた。当時も今も、彼はある時は詩人と呼ばれ、また他において評論家とされている。彼は詩、小説、評論等の、種々の形式を利用して、その思想を発表せんと試みた。そうすることが彼にとつて、また彼の属する時代にとつて必然であつた。ユーゴーの如きもそうである。

ユーゴーは、革命的ロマンチズム文学の始祖であるとされるが、同時に政治家でもあり、思想家でもあつた。その書くものは、極めて非専門的、綜合的の形態を有している。

この意味においては、文学および文学者の非専門化は、その大衆化と同義語である。例えば婦人文芸家が、文芸家であるよりも、一層「婦人」である時代において、また無産文芸家が、文芸家であるよりも、一層「無産者」である時代においては、文芸上における区分たる形式に囚われず、その何れをも、必要によって自由に、駆使することは、極めて当然であり、かつ必然である。

作家だか評論家だか分らないなどということは（たい子君の批評の力点だが）、今日の時代における我々にとつて、大した重要な問題ではないのだ。

かくて、かかる時代にあつては、当然、作家であると共に、評論家、あるいは思想家、あるいは家庭婦人であり、また労働婦人であると共に、評論家であり、詩人であり、あるいは農民婦人であると共に思想家であり、革命家であり、また一方小説家でもあるというように、実に種々であり、総合的であつて、この意味において、「時代」に理解があり、関心をもつものは、文芸上の分業などを、色々いうような、時代錯誤的の考えを抱く筈はないのだ。

然して、それらの現象も、単なる一時的のものでなく、将来の社会を予示するものである。即ち、将来にあつては、速い昔そうであつたように、「文芸家」などというものはなく、一般民衆が、直ちに文芸家であり、舞踊家であり、思想家であり、色々であるだろう。思想や、知識や、その他すべての文化現象が、一局部人の占有するものとして規定づけら

れる。いわゆる分業的、専門的の組織は、あらゆる人間に、「人間」としての、「総合」的の機能と機会とを、与えることを故意に拒む強権社会の組織である。

八

平林たい子君の愚かな持論は、もちろん、深い根底あるものではない。近視的の視野において、そして、ありきたりの「専門文学者は偉く雑文家は軽蔑すべきだ」とする、ブルジョアの意識をそのまま、何の反省もなく、あちこち持ち回つたまでであり、それに加えて、また幾分かは「分業」ということが、マルクス主義的の見地において、極めて大切なものであるとの考えから、ブルジョア文芸的分業をすら、絶対不変のものかの如く考える等の、たわいない無思想の暴露であることは言うまでもない。

文学少女の、たわけた持論を、鹿爪らしく取り上げて、とかく批評したりすることは、我ながらこつけいの至りだが、どうもこここのところ、乗りかけた船で仕方がなかつた。たい子君も読者もがまんして下さい。

ついでだが、たい子君よ、もう忘れても、こんな愚かな持論は、振り回さぬことだね。もつとも君が幼稚な文学少女で、そしてマルキストを嚙っている間は、こんな注文は無理かも知れぬが。